第２７号（平成２９年1月１５日）

『この世界の片隅に』

パーソナリティ　三浦ひろみ

明けましておめでとうございます。新しい年が心温まる年となりますように！

お正月といえば、お正月映画ですが、今年は広島の皆様に是非ご覧いただきたい映画があります。公開より話題を呼んでいる「この世界の片隅に」です。

広島出身で「夕凪の街 桜の国」の作者こうの史代さんの原作を、「マイマイ新子と千年の魔法」の片渕須直監督が熱望してアニメーション映画化。

舞台となるのは、昭和８年から終戦を迎える 20 年頃。広島の江波から呉へと嫁いだ一人の女性すずさんが、戦時下で工夫をしながら一生懸命に生きていく様が時にユーモアも交えつつ描かれています。呉にあんなに空爆があったことや、戦時下の人々の思いを改めて知ることができました。すずさんは、絵を描くことが好きな、おっとりした女性ですが、様々な苦難を受け止め、苦悶しながらも前へと進みます。普通の人々、一人ひとりがこの世界の片隅で懸命に生きていることが、いかに素晴らしく、尊く、たくましいことか。市井の人々への賛歌でもあります。

そして、広島・呉ゆかりの人々にとってはかけがえのない贈り物とも言える映画です。監督は度々広島や呉の地を訪れ、肌で空気を感じ綿密なリサーチのもと当時の風景・生活を蘇らせています。女優の「のん」さんは、すずさんの声を見事に演じきりました。おりづるタワーで行われた記者会見時、監督と共に現れたのんちゃんは、以前にも増して自然な輝きを放っていました。

©こうの史代・双葉社／
『この世界の片隅に』製作委員会

クラウドファンディングで全国のサポーターから制作資金を集めての本作。多くの人々の熱い想いの結晶でもあります。永遠に愛され語りつがれる映画「この世界の片隅に」是非ご覧下さい！

第２８号（平成２９年3月１５日）

『五感をくすぐる毎年恒例行事』

広島県議会議員　伊藤真由美

「そ～れっ！」ぺったん。ぺったん。年末には、我が家に昔からある台唐(だいがら)を使って、長年の親しい友人達とモチつき大会を開催しました。実はこの「ほっとコーナー」のバトンをいただいた前執筆者の三浦ひろみさんも毎年おモチつきをご一緒している仲間です。そして、次にバトンをお渡しする方も（笑)。

さて、この年に一度の「年末モチつき大会」は、毎年ほぼ１２月３０日に開催します。昔から祖母が２９モチはいけんけぇね、３０日にするんよ。といっていたのを覚えているからです。当分の間、使っていなかった台唐ですが、当時のなつかしさと、元来家にある古いものがいとおしくて活用しなくっちゃ！という思いから、今から２０年ほど前に、玄米モチをつこう！と思い立って親友二人で復活したことが始まりです。

レンガでできた大きな竈(かまど)に薪を焚き、羽釜いっぱいお湯を沸かして、さぁー！モチつきの準備です。か弱き女子二人で始めたモチつきでしたが、毎年少しずつ友人に声をかけて、今では男子も増え、おモチも上手につけるようになりました。

現在は、県議会議員として日々さまざまなことに追われるように過ごしていますが、それで

もこの毎年恒例行事だけは続けています。忙しすぎて本性を見失うことのないようにと、素の自分に戻ることを教えてくれるからです。
　みなさんも日々忙しすぎる毎日を送ってはいませんか？
　たまにはちょっとだけ、時間と自分の五感を使って楽しんでみてはいかがでしょうか？

第２９号（平成２９年5月１５日）

『７０歳のメイクアップアーティスト』

ナチュラルクリエイティブメーカー有限会社　坂井由紀子

　化粧筆で有名な熊野町に７０歳のメイクアップアーティストがいます。
毎年、筆の里工房のイベントで、訪れるお客様に丁寧に化粧筆の使い方を説明します。
普段は足元がよろよろしていて背中が曲がっていても化粧筆を持つと
シャキーン！とし、長年培ったメイクアップテクニックをレクチャー
７０歳とは思えません。
他のスタッフは疲れてこっそり座っていても（私のことです(+_+)）
１日中立ちっぱなしで、訪れたお客様にお声がけします。
お客様にメイクアップすることが本当に楽しい！と休みません。

　２０代で化粧品店を開業。まだまだ有名でなかった熊野筆を全国の
化粧品仲間に宣伝し、化粧筆について筆屋さんにアドバイスしてきました。
その功績が認められ筆文化復興功労者として昨年表彰されましたが
最近、体力と気力ともメキメキ落ち残念に思っていました。
なのに化粧筆を持つと大変身！！これもメイクアップの力なのかしら…？！

　とにかく化粧筆を使ってみなさんにきれいになってもらいたい私の母
以前入院した時も病院がメイクアップ教室になっていましたから。
入院していた方の娘さんが「メイクしてもらって久しぶりに笑顔をみました。」と
メイクアップの力ってすごいな。それともうちの母がすごいのかな。
これからはデイケアでまた沢山の人を素敵に幸せにしてほしいです。

第３０号（平成２９年7月１５日）

『母が残した宝物』

広島文化学園女子短期大学 コミュニティ生活学科　准教授
ラピスラズリ代表　烏田いづみ

　２０１７年も半分終わってしまいました。旧暦の６月末夏越の祓という行事があります。「**夏越の祓**」は、半年分の穢れを落とす神社の行事で、残り半年の健康と厄除けを祈願します。今年私は様々な体調不良に悩まされ、夏越の祓には、雨が降ろうが槍が降ろうが必ず神社へ馳せ参じようと心に決めています。何より１月末母を 87 歳で見送り、心にも大きな傷ができたようで、未だにヒリヒリしている状態なのです。
　母を失ってみてどんなに自分の性格形成や趣味嗜好に影響があったか、今更ながら気づきました。私は３０年コーディネーターという肩書で仕事をしています。テーブル・フード・空間・店舗・ブライダル等のコーディネートの仕事です。

　３歳ぐらいから器・絵の展覧会（あまりにも退屈で脱走したこともありますが）に連れ回され、中学生でフランス料理、お茶。高校生で歌舞伎やオペラと、ちょっと早熟な様々な文化に触れさせた母の刷り込みの教育が、私をこの仕事に導いた。と思ってしまいます。

そんな母が残した茶道具達・・。しまいこんでしまっていましたが、なんだかもったいない。片付けながら、本来の使い方ではない方法で日常のシーンに登場させてしまおうと決意。

上の写真はお茶の風呂先屏風。通常はお点前の道具の後ろに立てる屏風で、道具を引き立てたり保護するためのもの。それを、今回お花のアレンジの背景に使いました。それもテーブルの上に置いて・・

下の写真は漆の水指をコーディネートしたもの。本来水指は茶釜に水を足したり、茶碗や茶筅を洗う水を入れておくための器。

「ごめんなさい母上様。ある時は花を入れ又ある時はワインクーラーとしてワインを入れてしまっています。

方法は違えども、日本文化の美しさ、素晴らしさを必ずや後世に伝えて行きますから。これもあなたの教育の賜物・・・」

そっと写真に手を併せていると母の声が聞こえてきました。いつも言われていたセリフ。「ちゃんとしなさい。ちゃんと！！」

第３１号（平成２９年9月１５日）

『自然とアートと平和と』

特定非営利活動法人 Heart of Peace ひろしま代表
中川圭子

私の人生の大きな転換期であった 1999 年～2000 年。
自分の中に響いた「ひろしま」を自問自答し始め、いつの間にか、平和・環境の様々なイベントに関わっている自分がありました。

「子供たちにどんな未来を、地球を、残してあげることができるのだろう～。私にできることは・・？」そんな事ばかりを考えていたら、還暦を前に今までの仲間達とＮＰＯを立ち上げていました。「ひろしまから音楽を通じて世界に平和を発信したい！」ひとつの思い、きっかけ、出会いが、大きな波紋となって繋がり、広がっています。

先日、この広島・長崎の日を挟んで、旧日銀広島支店で開催した「平和と美術と音楽と」が無事終わりました。

自分に疲れた時、朝早く起きて、海から昇る朝陽を見始めた事からいろいろな価値観が変わってきました。

会期中、浜にスペインのアーティスト、アンヘル・オーレンサン氏をご案内したら、それからほぼ毎日の様に、朝陽と共にこの浜で子供の様になってその場にあるもので、インスタレーションし、壊していく様を目の当たりにし、アートと自然の融合の素晴らしさを体感しました。

だんだん朝のインスタレーションの参加者も増え、みんな、まるで子供の様になって楽しみました。夢の世界がここで繰り広げられたのです。

私の中に彷彿と湧き上がっていた「未来の子供達に残したい、平和の森、アートの森、いのちの森・・」を夢見て・・。

第３２号（平成２９年１１月１５日）

『人生フルーツ』

読者　柴田直美

横川シネマはいつもちょっと変わった映画を上映しています。コマーシャリズムにのらないドキュメンタリー作品が多いように感じます。そんな横川シネマで、ここ数年で最大のヒット作、ロングランが「人生フルーツ」ではないでしょうか。

映画の舞台は[※1]高蔵寺ニュータウンの[※2]津端さんち、[※3]アントニン・レーモンド風の木造平屋と家庭菜園。映画は津端さん夫妻の日常をひたすら追っていきます。

「起きて、食べて、耕して、収穫して・・・」の繰り返しなのですが、なんだか楽しそうで元気な老夫婦。「こんな年寄りになりたいなあ」とつい思ってしまいます。

野菜と果物は自給自足。パソコンや携帯電話はなくて、その代わり津端さんは毎日お手紙を書きます。身近な自然の有り難さ、自らの手でつくる生活の愛おしさがスクリーンからあふれてくるようで、「幸せな気持ち」を共有できる素敵な映画でした。

さて、私はこの映画を見終わったあと、とある別の映画のことを思い出していました。それは、以前やはり横川シネマで見た「[※4]ニュータウン物語」です。こちらは岡山県の山陽団地が舞台。団地で成長した若者が、高齢化、空洞化が進む景色を追いかけ、「僕の育った団地の未来はどうなっていくのだろう？」と問いかけるようなドキュメンタリーでした。

私は「人生フルーツ」は「ニュータウン物語」のアンサー映画のようだな、と感じました。ただ、津端夫妻のように「団地の２区画を購入し、片方にシンプルだけどセンスのよい家を建て、もう片方は野菜園・フルーツ園にし、空間も暮らしも時間をかけて醸成していく・・・」というのはあくまで特殊解です。現実の郊外団地では、空き家となったあと土地ごと売りに出され、１区画が半分にされて、１号地、２号地と狭くなって再販されてしまうことが多いです。ちょっと悲しいですね。

土地利用は長い目で見なくてはいけないし、便利に慣れた生活を大きく変えることも難しいです。でも、津端さんのような暮らしに憧れる気持ちも少なからずあり、この夏、我が家にもブルーベリーの鉢植えが増えました。

鉢の世話を始めてから知ったのですが、ブルーベリーは紅葉するそうです。朝晩肌寒くなったせいでしょうか。我が家でも葉先にほんのり秋の兆しが見られます。

※１　高蔵寺ニュータウン：愛知県春日井市にあります。1960 年代に造成が始まりました。千里ニュータウン、多摩ニュータウンなどと並ぶ有名なニュータウンです。
※２　津端修一：映画の主人公。建築家。高蔵寺ニュータウンの計画にも携わりました。
※３　アントニン・レーモンド：チェコ出身の建築家。戦前・戦後の日本で活躍しました。
※４　ニュータウン物語：2003 年、本田孝義監督。

第３３号（平成３０年1月１５日）

『当たり前アラカルト』

ガラス造形作家　宮田洋子

国の外に旅行に行くと、当たり前だと思っていたことが覆され、別の当たり前を目の当たりにすることがよくある。

いや、いわゆる文明国に行った場合は、そんなに驚くことはないけれど・・・

例えば、カンボジアあたりでは、１台のバイクに３～４人乗ってヘルメットもかぶらず走ってるのが当たり前だったり、
そうそう、ミャンマーのインレイ湖の水上生活者の調査にくっついて行った時の事、
湖の中に家を建てて生活しているのだから往来は、水の上を小さなボートで行くのだけれど、幼稚園児くらいの女の子ですら、保護者なしで一人でボートを操っているのだ。
当たり前のこととして、救命胴衣は付けていない。安全対策？それなあに？って感じだ。
この湖で救命胴衣を付けているのは我々外国人だけ。それが、まあ、ドン臭く見えることったらない。
片足立ちし、もう一方の足でオールを漕ぎながらニコニコと通り過ぎていく男の子の背景の浮島に猫を見かけたので、まさかと思いつつ、「ねえ、猫は泳いでお家に帰るの」と、ガイドさんに聞いてみたら、「もちろんです」と、当たり前のことを何で聞くかと言う顔をされた。
もう、ビックリ！猫は、濡れるのが嫌いという私の当たり前は見事に覆されたのである。
　これだから、現代文明にあまり毒されていない国への旅のほうが面白い。と、私は常々思っているのだが・・・

　近年、もろに現代文明国で、当たり前が覆された事があった。
それは、ドイツ、バイエルン州立の Frauenau Glass Museum からオファーが来て展覧会に出品するため現地に行った折、Museum の館長さんが、大きな川の中洲にできた古都を案内して下さった時の事だ。
　築何百年かの素敵な石造りの家並みを歩いていると、外壁の３階あたりに、「背比べの柱の傷」みたいな印がいくつも引いてあり、年代が書いてあるのを発見。聞けば、その線は洪水の時、水に浸かった高さだと言う。
何百年も前から、何度も何度も水に浸かっている印・・・それが、これ見よがしに、何だか誇らしげに記してあるのだ。
　日本だったら、こんな町には堤防を作る。川が見えないくらいの高さで、閉塞感一杯だが、これで安心。無防備に暮らす。そして、ある日、「想定外」の水が来て、大惨事ってこともあったりする。これが日本の安全安心だ。
　この古都には、堤防は全く無い。
「堤防？冗談じゃない、この美しい景色を壊すような無粋な事が出来るか。水が来る時は避難しとけばいいじゃないか。」と言うことらしい。だから、川沿いの遊歩道を、美しい川に見とれながらボンヤリ歩こうものなら、川に落ちかねないのだ。
「でも大丈夫！その対策として、遊歩道沿いの石垣に、救助用の浮き輪とフック付きの竿が設置してあります。落ちたらそれで助けてもらってください。え？通りすがりの人がいなかったら？その時は自己責任で・・・」
・・・なんとも・・・かなりおおらか、と、言うか・・・

遊歩道沿いの石垣に救助用の竿

　つまり、安心安全のために景観を犠牲にするという発想が全くないのだ。
日本と真逆の当たり前がそこにあった。
さあ、どっちを選ぶ？どっちもどっち。一長一短。
できれば、両方の良いとこ取りをしたいなあ。
ともあれ、世界全体で見たら、この件に関しては「日本の当たり前」の方が、特殊なのかもしれない。